

ドイツ・二重の戦後

岩本 真理子

キーワード： ドイツ再統一、第二次世界大戦、東西分断、冷戦、戦後処理

二重の戦後処理

第二次世界大戦終了後、占領国によって分断され、ドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国という異なる国家として歩んできたドイツが、1990年に悲願の再統一を果たしてからすでに20年が経つ。もはや第二次世界大戦はもちろんのこと、冷戦時代さえも遠い昔のことと思われるかもしれない。しかし実際には、今世紀になってからドイツでは第二次大戦と冷戦という連続する二つの戦争の「戦後処理」とでもいうべき様々な現象が生じている。冷戦時代の戦後処理が今まさに進行中であるのは当然であるとしても、第二次大戦の戦後処理については、あたかも東西分断時代には戦後処理も行われぬまま時間が止まっていたかのようなのである。これらの現象は、1999年にドイツ連邦の首都に再び咲いたベルリンにおいて、もっとも顕著である。ここではいくつかの事象に焦点を当て、それらが現在のドイツにおいてどのような意味を持っているのかを考えてみたい。

歴史認識の変化

ドイツは1871年に「ドイツ帝国」という近代的統一国家となったが、その後現在に至るまでに、国の体制崩壊あるいは激変を4回体験している。1918年のドイツ革命によるドイツ帝国の崩壊、1931年のヒトラーの政権掌握によるワイマル共和国の解体、1945年の第二次大戦敗北による第三帝国の崩壊、そしてベルリンの壁の崩壊を契機とする1990年のドイツ民主共和国、いわゆる旧東ドイツの消滅である。旧東ドイツに居住していた高齢者であれば、これらの国家崩壊をすべて体験し、記憶している可能性も十分ある。ワイマル共和国の消滅は政権交代による体制の変化であって国家の崩壊とまでは言えないが、それを除外したとしても、1918年の帝国崩壊の記憶を留めている旧東ドイツ人は、一生の間に祖国消滅を3度経験していることになる。

このようにたびたび体制の激変を体験したドイツで、歴史認識が時代とともに大きく変わっていくのは不思議ではない。歴史認識の変化は、過去の支配者たちの評価の変化という形で現れる。そ

のひとつが、激変の時代以前のドイツ帝国、すなわちプロイセン王国のホーエンツォレルン家が支配していたドイツ帝国時代に関する認識の変化である。

現在のドイツとオーストリアにほぼ相当する地域は、1806年までは「神聖ローマ帝国」と呼ばれていたが、この「帝国」は決して単独の国家ではなかった。1814～15年のウィーン会議以前の神聖ローマ帝国は300を超える小邦の集合体であったという事実が示すように、統一国家としてのドイツの歴史は非常に浅いものである。1871年に初めて統一国家「ドイツ帝国」が誕生したが、その際にオーストリアを制して主導権を握ったのが、ベルリンを首都とするプロイセン王国である。ただしこのドイツ帝国もまた、その内部に22の君主国と3つの自由都市が存続していたのであるから、帝国とはいえ、事実上は連邦である。日本では、ドイツの旧名がプロイセンであるかのような誤解がしばしば見受けられるが、プロイセンとはドイツの一部分を成していた王国の名に過ぎない。したがって、現在の「ドイツ人」にとってのプロイセンもまた、旧プロイセン領であるか否かによって、その意味は大きく異なってくる。プロイセン王国の首都であったベルリンにとって、プロイセンの歴史が重要な意味を持つのは当然のことである。分断時代には影が薄かったプロイセン関係の地名や施設が、今ベルリン各所で復活・再建されつつある。

フリードリヒ大王の帰還

南ドイツ出身のホーエンツォレルン一族の領土となったプロイセン王国を強大な国家にしたのは、啓蒙専制君主として知られるフリードリヒ2世、通称フリードリヒ大王¹である。彼は「軍人王」と渾名された父王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世²の遺した強大な軍隊をさらに増強することで、プロイセン王国をヨーロッパ有数の強国に成長させた。バイエルンやオーストリアと比べ、比較的若い国家であるプロイセンが、後にドイツ全体を統一する主導権を掌握するまでになったのは、フリードリヒ2世の功績によるところが大きい。

私人としてのフリードリヒ2世が芸術愛好家であったことは有名である。彼がベルリン近郊のポツダムに建造させたサンサーシ宮殿はロココ建築の代表と称されるが、ベルリンでの公務を終えると彼はサンサーシ宮殿に向かい、そこでごく親しい友人のみを相手として音楽や芸術談義を楽しんだ。彼はすでにサンサーシ宮殿建設計画の時点で、ここに自らの墓所を設置することを決め、テラス状庭園の最上段に墓所を作らせていた。葬儀のあり方についても、1752年に書いた遺言書の中で「私は哲学者として生きたのであり、哲学者として葬られることを望む。虚飾も豪華さもなく、儀式など一切せずに」³と自ら指示している。

ところが彼の死後、後継者である甥フリードリヒ・ヴィルヘルム2世⁴はフリードリヒ大王の遺

志に反して、華やかな儀式を執り行い、彼の遺体をその父王と同じポツダムのガルニゾン教会に安置した。第二次大戦中、フリードリヒ大王の棺は爆撃を逃れるためにハルツ山脈のカリ鉱山に疎開させられた。ポツダムは1945年4月に激しい空爆を受け、多くの建物が損傷した。戦後はポツダムもハルツ地方も東ドイツ領となったが、ガルニゾン教会は東ドイツ政府の政策により、取り壊されてしまう。共産主義国家である東ドイツ政府は、プロイセン王国に関するものを封建主義や軍国主義の象徴として敵視し、数多くの建築などを破壊して、プロイセン王国の記憶を抹殺しようとしたのである。大王の遺骸はハルツからひそかに持ち出され、転々としたあげくに1952年にはホーエンツォレルン家の本拠地である南ドイツのヘヒンゲン城に移されている。

再統一の1年後である1991年、ようやく彼の遺骸は彼が望んでいたサンスーシ宮殿前の墓所に落ち着くことができた。死後205年の歳月を経た後の、安息の場所への帰還であった。この時、およそ5万人の人々が大王の改葬を見守ったという。当時の首相ヘルムート・コールの出席が予定されていたため、国葬級の扱いなのではないかという議論も生じたが、コールが当時のホーエンツォレルン家当主の友人であるということで、一個人としての出席とみなされ、事なきを得た。

大王の遺骸がたどってきた運命が示すように、封建制度による王権を真っ向から否定する共産主義が支配する旧東ドイツでは、ホーエンツォレルン家の功績は軽視されていた。現在ベルリンのウンター・デン・リンデンにある「フリードリヒ大王銅像」のたどった運命は、フリードリヒに対する旧東ドイツの評価を明らかにしている。フンボルト大学の前に立つこの銅像は、1851年に除幕されたものである。しかし、1950年に東ドイツが成立すると、旧東ベルリン地区にあったこの銅像は取り壊されてしまった。現在目にすることができるのは、1980年11月に再建されたものである。再建の翌年にこの銅像を目にした魚住昌良は、その驚きを次のように報告している。

1981年の秋、やや久しぶりに東ベルリンを訪れた私は、ウンター・デン・リンデンの大通り、フンボルト大学の正門前に立つフリードリヒ大王の堂々たる騎馬姿の銅像を見て、一瞬我が目を疑ったことを鮮明に覚えています。その前の1972年に来たときには何もなかったし、大王こそ軍国主義の権化で封建領主の典型と教えるのが当時の当国（旧東独）政府の公式説明と聞いていたからでした。そのとき会った東ドイツの歴史家B・テップファー教授は、今度は祖国を守った英雄になったのでしょうか、と笑いながら話してくれたものです。⁵

ヒトラーがフリードリヒ大王を崇拝していたことも、戦後ドイツでのフリードリヒの評価に影を落としていたとも考えられる。ヒトラーの執務室には大王の肖像画が飾られていたこと、また敗色濃厚となった時期にはフリードリヒ大王の「ブランデンブルクの奇蹟」⁶が自分にも起こるとヒトラーが信じていたことなどは有名な逸話である。⁷ともあれ、軍国主義と封建制度の権化と考えられ

ていたフリードリヒの銅像が旧東ベルリンに再建されたことは、歴史家を驚かせるのに十分であった。1980年はまだ冷戦時代ではあるが、プロイセン王家に対する態度も、東ドイツ誕生直後の1950年代ほどにはイデオロギーに縛られなくなっていたのであろう。

皇帝騎馬像の再建

第二次世界大戦後のドイツにおいて、かつての「ドイツ帝国」の偉大さを示すような歴史的記念碑などが否定されたケースは、ベルリンだけでなく旧西ドイツ側にも見られる。ラインラント＝プファルツ州コブレンツの、ライン河とモーゼル川の合流地点「ドイッチェス・エック」には、1897年にドイツ皇帝ヴィルヘルム1世⁸の騎馬像が設置されていた。騎馬像だけでも高さ14メートル、台座と合わせると高さ37メートルという巨大なものである。

大戦末期の1945年3月、巨大な台座の上に立つ騎馬像は要塞と誤認され、空爆の標的となっほぼ完全に破壊された。終戦当初は皇帝像の一部の残骸が残っていたが、同年のうちに台座部分のみを残して撤去された。1953年に当時の西ドイツ大統領テオドール・ホイスが、ドイツ全州の紋章を刻ませた「ドイツ統一警告の碑」と呼ばれる新しい記念碑の序幕を行ったが、これはドイツの再統一の願いを込めたものであった。その数年後には、皇帝騎馬像を再建しようという動きもあったが、ドイッチェス・エックを所有するラインラント＝プファルツ州が拒否した。1987年にもコブレンツのある出版業者が、私費で銅像を再建してコブレンツ市に寄贈したいと州に申し出たが、州は再びこれを拒絶した。ドイッチェス・エックの所有権が州からコブレンツ市に移り、ドイツが再統一されたのち、ようやく再建が決定した皇帝騎馬像は1993年に完成し、48年ぶりに元の場所に設置され、現在に到っている。⁹ 設置場所の所有権の問題もあっただろうが、かつてのドイツ帝国の威厳を示すような皇帝騎馬像の復活は、東西分断時代のドイツには望ましくなかったのかと思わせるような経緯である。

皇帝騎馬像をめぐる問題には、プロイセンに対するコブレンツ市とラインラント＝プファルツ州の感情の違いもからんでいるのかもしれない。コブレンツ市郊外に、かつてプロイセン王家の離宮として使用されていたシュトルツェンフェルス城がある。これは1823年に当時プロイセン王子であったフリードリヒ・ヴィルヘルム4世¹⁰に、コブレンツ市から寄贈されたものである。王座についてからも「王座のロマン主義者」と呼ばれたフリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、廃墟と化していたこの城を著名な建築家フリードリヒ・シンケルのプランに沿って再建させた。かくして、中世の城らしい外観と近代的で快適な居住空間を備え、ライン河を一望できるシュトルツェンフェルス城は、プロイセン王家の人々のお気に入りの別荘となった。また、1844年にはすでに最初の見学

会が催されていることが示すように、この城はラインラントにおけるプロイセンの文化政策の中心地でもあったのである。¹¹このようにして、コブレンツ市はプロイセン王家のラインラント支配の拠点となった。

しかしもともとライン同盟によって独自の政治や文化を持続していたラインラントという土地柄は、プロイセンによる支配を快く思わない傾向があった。現在でもラインラントには、プロイセンあるいはベルリンに対する反感ないしはライヴァル意識が垣間見られる。プロイセンに対するこういった意識や歴史の違いが、ラインラントの一部であるラインラント＝プファルツ州と、その中の一都市に過ぎないとは言え、プロイセン王家と密接な関係にあったコブレンツ市とでは、皇帝騎馬像に対する心理的な距離が異なっていたのかもしれない。

ベルリン宮殿再建

ベルリンという都市自体も、数奇な運命をたどって現在にいたっている。かつてはプロイセン王国の首都として整備され、19世紀のドイツ統一から第二次世界大戦の敗北まではドイツ全体の首都であった。ナチス時代にはヒトラーの野望のもと、「世界首都ゲルマニア」へのベルリン大改造計画が始まっていた。「ゲルマニア」は1950年に完成する予定であったが、第二次世界大戦の激化によって計画は中断された。冷戦時代はベルリンもソ連占領地区と連合軍占領地区に分断され、東ベルリンは東ドイツの首都となった。西ベルリンはドイツ連邦共和国（西ドイツ）の飛び地であり、共産主義国家東ドイツのただなかであって「資本主義のショウインドー」という特殊な役割を果たしていた。ベルリンが再びドイツの首都になったのは、ドイツ再統一の9年後のことである。

第二次世界大戦末期に激しい空爆と地上戦に見舞われたベルリンは瓦礫の山と化した。それはまさに Stunde Null 「ゼロ時」と称されたほどの「無」の状態であった。したがって、無傷の建物などほぼ皆無であったことが、当時の写真からうかがえる。当然ながら、歴史的に重要な建築物も甚大な損傷をこうむっている。

歴代のホーエンツォレルン家は、ベルリンおよび近郊のポツダムに宮殿をいくつも建設した。ポツダムには前述のフリードリヒ大王が建てさせたサンサーシ宮殿、「ポツダム宣言」発布の場として名高いツェッペーリエンホーフ、新宮殿、バーベルスベルク城など、多くの宮殿が残っているが、ベルリンに現存しているのはシャルロッテンブルクのみである。プロイセン王国の中心はウンター・デン・リンデンに面したベルリン王宮だったが、この王宮はドイツのたどった数奇な運命の象徴にもなっている。

1873年に明治政府の岩倉使節団も訪問したこの宮殿は、当時のドイツ帝国政府の中枢であった。

この宮殿について、*Berlin-Ein Rundgang vor und nach dem Mauerfall* (『壁崩壊前後のベルリン巡り』)には、次のような奇妙な説明が付されている。

不条理に聞こえるかもしれないが、現在、共和国宮殿がもはや建っていない場所には、かつてベルリン宮殿がもはや建っていなかった。¹²

ベルリン宮殿は、大戦末期の激戦でひどい損傷をこうむりはしたが、それが原因で取り壊されたわけではなく、戦後に部分的な再建もなされている。しかし、東ドイツ政府は1950年にこの宮殿を爆破して完全に消滅させてしまった。その理由は、「東ドイツ政府がこの統治の館に、憎むべき帝国軍隊主義の象徴を見てとった」¹³からである。その場所が、その後長らく軍事パレードの場所として使われたのは、歴史の皮肉であろうか。さらに1976年には、この場所に「共和国宮殿」が建てられた。宮殿とは言っても、現代的で無機質なガラス張りのビルである。内部には東ドイツ政府議会場が設けられたが、レストラン、ボーリング場なども備えた多機能ビルであった。とりわけ目を引いたのはエントランスホールで、床にはスウェーデンから輸入した白い大理石が敷かれ、天井には数千ものランプが輝いていた。このランプ照明設置に関しては、当時の東ドイツ第一書記長エーリッヒ・ホーネッカーがとりわけ力を入れていたことから、共和国宮殿は「エーリッヒのランプ屋さん」と揶揄されたという。¹⁴

ベルリンの壁崩壊後、共和国宮殿の利用法が議論されたが、長い議論の末に解体されることとなった。アスベストが使用されていたせいもあっただろうが、再統一後のドイツでは、かつて東ドイツ政府がプロイセン王国の記憶を抹殺しようとしたのと同じように、東ドイツ時代の記憶を留めるものをなるべく排除しようとする動きが見て取れる。共和国宮殿の解体作業の工程で、かつての王宮の遺構が姿を現して話題になった。跡地には、現代的な形で王宮が再建されることになっている。この場所は世界遺産でもある「博物館島」の真向かいであるが、2015年完成予定の新王宮には「フンボルト・フォーラム」が設置され、博物館島と共に芸術・文化・科学の一大拠点となる予定である。

地名変更

このように、東ドイツ時代にはその価値を否定されていた歴史的建造物が再建されつつあるのだが、それだけではない。ベルリン市内の地名変更もまた、歴史認識の明らかな変化を示している。ベルリンに限らず、ドイツではその土地にゆかりのある王侯貴族、芸術家、政治家の名前が通りの名称に利用されることが多い。その点ではベルリンも例外ではないが、ベルリンの場合は政治情勢

によって通りの名称がたびたび変更されている点が特徴的である。プロイセン時代にはホーエンツォレルン一族の名前がついていた通りが、ナチス時代にはナチスの高官の名前に変更されていた例もある。名称変更が最も大規模に行われたのは、分断時代の旧東ベルリン地区においてである。1951年の4月から5月にかけて、東ベルリンでは150以上の通りの名が変更されたという。¹⁵たとえば、ベルリンで最も美しいと言われるジャンダルメン広場周辺だけ見ても、イエーガー通りはオットー・ヌシュケ通り、タオベン通りはヨハネス・ディークマン通り、マルクグラーフエン通りはヴィルヘルム・キュルツ通り、そしてジャンダルメン広場西側の、官公庁が集中していたヴィルヘルム通りの北半分ほどはオットー・グローテヴォール通りへと変更されている。東ベルリン時代に採用されたこれらの名前は、すべて東ドイツの政治家の名前である。皇帝の名前を付したヴィルヘルム通りと「辺境伯」を意味するマルクグラーフエン通りはともかく、イデオロギー的にも特に問題のない「イエーガー（狩人）」、「タオベン（鳩）」といった名称までも東ドイツの政治家の名前に置き換えたことは、強引なまでの歴史否定とプロパガンダを感じさせる。

しかしベルリンが抱えている重い歴史を最も如実に表すのは、ブランデンブルク門とライプツィヒ広場を結ぶエーベルト通りであるかもしれない。この名称は、ワイマル共和国時代の政治家であり、ドイツの初代大統領でもあるエーベルト¹⁶にちなむものであったが、ナチス時代にはヘルマン・ゲーリング通りに改称されていた。ナチスのナンバーツー、国家元帥のゲーリング¹⁷の名前である。ヒトラー以外のナチス高官中、自らの名前を地名につけさせたのは彼だけではないかと思われるが、皮肉なことにちょうどこの位置に「ベルリンの壁」が建てられたため、旧ヘルマン・ゲーリング通りはすべて立ち入り禁止のデッドゾーンとなった。つまり東西分断時代には通りそのものが存在しなかったのである。壁崩壊後に復活したこの通りは、旧称の「エーベルト通り」に戻っている。

テロのトポグラフィ

再統一の9年後、1999年に首都に再び咲いたベルリンでは、現在も都市大改造が進行中である。東西分断の象徴であった「ベルリンの壁」は、その破片が土産物として売られていた時期もあったが、現在は歴史の証人として各所で保存されている。周知のように、分断時代の東西ベルリン間にはいくつもの検問所があり、そこで厳しいチェックを受けなければ通行できなかった。検問所の中でもっとも有名な「チェックポイント・チャーリー」は、かつて東ベルリンから西ベルリンへ脱出を図る人々にとっては、命がけで通過する場所であったのだが、現在では観光名所となっている。土嚢を積んだ検問所でアメリカ兵またはソ連兵、時にはフランス兵に扮したスタッフと記念撮影をする人、また検問所前にある「壁博物館」を訪れる人、あるいは「チェックポイント・カフェ」で軽食をとる

人などで、この界限はいつもにぎわっている。その様子はほとんど皮肉なまでに平和な光景である。そこから 350m ほど西に進んだニーダーキルヒナー通りには、現在も道沿いに壁が保存されている。つい最近まで、壁の内側には一見空地のように見える空間が広がっていたが、実はこの土地は歴史的に重要な場所である。

ここには「テロのトポグラフィー (Topographie des Terrors)」という奇妙な名前が付されている。この「テロのトポグラフィー」別名「プリンツ・アルブレヒト・ゲレンデ」は、かつてナチス・ドイツの親衛隊 (SS) の本部、そして後には秘密国家警察 (Geheime Staatspolizei、通称ゲシュタポ) 本部と国家公安局本部が存在していた場所である。1936 年の地図 (別図参照)¹⁸を見ると、この地区にはナチス政府の官公庁が集中していたことがわかる。その南端、旧プリンツ・アルブレヒト通りに Geheime Staatspolizei の表記がある。戦後、この通りは連続するヴィルヘルム通りに含まれていたが、その後さらに第二次大戦の英雄ケーテ・ニーダーキルヒナーの名を冠し、ニーダーキルヒナー通りと改名されている。戦後、ソ連支配下にあったこの地区の再開発が始まり、ゲシュタポ本部として利用されていた建物も 1956 年に爆薬を使って取り壊された。しかし、その後この通りに沿って「ベルリンの壁」が設置されたため、壁の真横 (西ベルリン側) に位置するこの土地の利用も、東西対立が深刻な間は事実上不可能となった。結局この土地はその後数十年、更地のまま取り残されていたのである。

1987 年、ようやくこの土地の再開発が始まった。かつてのプリンツ・アルブレヒト・ゲレンデを掘り返したところ、地中からゲシュタポ専用牢獄が姿を現わした。これがきっかけとなり、この場所を博物館として利用することが決定した。

しかし経済的理由から計画は暗礁に乗り上げた。その後「テロのトポグラフィー」は一種の野外歴史博物館として利用されることとなり、地表及び地下の牢獄跡に、ナチス政権による迫害の歴史を語る写真と説明文を記載した頑丈なパネルが並び、小さな仮設販売所ではこの場所に秘められた暗い歴史を語る貴重な資料を販売していた。

その場所に「ドキュメントセンター」建設計画が持ち上がったのは、再統一後の 2004 年のことである。センターの設計は公募で選ばれ、2007 年から工事が始まり、2010 年 5 月 6 日について開館にこぎつけた。筆者が訪れた 2010 年 3 月の時点では、かつての野外展示場の大部分がまだ工事中で立ち入り禁止となっていたが、工事現場の傍らにゲシュタポの歴史に関する写真と説明のパネルが並び、かなりの数の見学者が次から次へと訪れており、情報センターを兼ねた仮設販売所も場所を少し移動して営業していた。完全に観光スポットと化したチェックポイント・チャーリーのような妙に浮ついた雰囲気は感じられないが、真剣な面持ちでパネルの説明を食い入るように読む人々がいる一方、SS やゲシュタポの高官たちの写真の前に立って記念撮影をしているドイツ人もおり、一種奇妙な光景を呈していた。現在は同様の展示が屋内でなされているようである。

ブランデンブルク門周辺

かつては東西ベルリン分断の象徴であったブランデンブルク門もまた、チェックポイント・チャーリー同様冷戦時代には想像もできなかったほど平和な観光地となっている。冷戦中は硬く閉ざされていたこの門を、デジタルカメラを手にした観光客が神秘的な面持ちでくぐっては振り返り、物思いにふけている。ブランデンブルク門の上に立つ四頭立て馬車「クヴァドリガ」は1945年のベルリン陥落の際に破壊されたが、幸い鋳型が残っていたため、1958年に再び型取りをして再建されたものである。ブランデンブルク門東側のパリ広場には、常に観光客の団体や社会見学をする学生たちの集団が群れなしている。パリ広場に面したホテル・アドロン・ケンピンスキーは、戦前はベルリン随一の高級ホテルで、ドイツ皇帝を始めとして、多くの王侯貴族や著名人が宿泊した場所である。1945年のベルリン陥落の際に焼失したホテル・アドロンは、再統一後の1997年に超一流ホテルとして再生している。

美しく蘇ったブランデンブルク門、パリ広場、ホテル・アドロンによって、旧東ベルリンであったこの界限は威厳を漂わせた優雅な場所として生まれ変わったが、ブランデンブルク門からわずか数十メートルの地点に、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人記念碑」がある。何も書かれていない2700以上の石碑が並ぶ沈黙の空間である。この記念碑群の中に身をおいて旧西ベルリン側に視線を向けると、ドイツ連邦議会議事堂がすぐそばにあることがわかる。記念碑の所在地は東西分断時代にはベルリンの壁の真横であり、嚴重に立ち入りが禁じられたデッドゾーンであった。ブランデンブルク門からライプツィヒ広場まで続いていたデッドゾーンは、かつては行政の中心であり、地表には何も残されていなくとも、地下にその名残を見ることができる。

記念碑の工事中、工事現場の地下から地下壕が姿を現し、それがナチスの宣伝大臣ゲベルス¹⁹のものであることが判明した。ちょうどこの場所に、ゲベルスの邸宅があったのである。ゲベルスの地下壕の処分を巡っては、これを展示室にしてはどうかという議論もあったが、ベルリン市はこの提案を拒絶し、地下壕は再び封印され、埋め戻された。²⁰

ベルリン市が拒絶したのは理由がある。ゲベルスの地下壕も含め、ベルリンの地下にはいまだにナチス時代の地下壕その他の施設が眠っている。そのような場所がネオナチの「巡礼地」になることをベルリン市は恐れたのである。

同じことが、ゲベルスの地下壕のすぐ近くで発見された「運転手の地下壕」にも言える。先述のように、ブランデンブルク門周辺は、ナチス時代以前からすでに官公庁街であった。門にほど近いヴィルヘルム通りには、ドイツ帝国時代の、あるいはナチス時代の官公庁関係の施設が立ち並んでいた。ヴィルヘルム通りからフォス通りにかけての地区には、ヒトラーがシュペーアに命じて建設させた「総統官邸」があり、敷地内にはヒトラー専属の運転手用の地下壕があった。これが発見さ

れたのは1990年のことである。内部には親衛隊の姿を英雄的に描いた壁画8枚が、良い保存状態で残されていた。この地下壕もまた、ネオナチの巡礼地となることを恐れたベルリン市によって封印されたままである。

大戦末期、総統官邸敷地内の地下に巨大な地下壕が作られた。Führerbunker「総統の地下壕」である。1945年、ヒトラーと側近たちが最期の日々を送った地下壕はソ連軍によって内部が破壊されたが、「爆撃に50年は持ちこたえられる」という想定で設計された地下壕を完全に破壊することは難しく、廃墟の状態で地下に放置されていた。戦後、総統官邸跡地は東ベルリン領となり、跡地には旧東ドイツでは一般的な、画一的なアパート群が建設された。今も残るアパート群の建設によって、この地にかつて威容を誇った総統官邸があったことなど忘れ去られたかのようであった。

1988年になって、東ドイツ政府は「総統の地下壕」を完全に破壊しようと試みたが、あまりにも頑丈な構造であったために、膨大な量の火薬を使用したにもかかわらず、天井部分のみの破壊が完了した時点で、東ドイツ政府は予算を使い切ってしまった。計画経済を実施していた東ドイツにはそれ以上の予算を捻出することもできず、破壊作業をそれ以上進めることができなかったのである。やむを得ず、東ドイツ政府は壊れかけた「総統の地下壕」を埋め戻すこととした。その翌年には東ドイツ政府そのものが消滅するのである。

埋められた地下壕が脚光を浴び始めたきっかけは、2004年に製作されたドイツ映画 *Der Untergang* (邦題『ヒトラー ～最期の12日間～』)において、この地下壕が主な舞台となったことであった。この映画の原作は、ヒトラーの秘書を務めたトラウデル・ユングの回顧録 *Bis zur letzten Stunde* (邦訳『私はヒトラーの秘書だった』)である。2002年に出版された回顧録は大変な反響を呼び、反響の大きさが映画化への道を開いたのである。さらに映画公開の1年後の2005年10月には、映像の追加と再編集を経たバージョンが、2夜連続のテレビ特別番組として放送された。映画版も、ドイツでは異例ともいえる450万人の観客動員数を誇ったが、テレビ放映の際にはおよそ800万人が視聴したという。²¹ この映画とテレビ特別番組によって、東ドイツ政府があれほど破壊に執着した「総統の地下壕」に対する人々の関心が高まったのは当然の結果である。「総統の地下壕」が存在した場所は前述の「ユダヤ人記念碑」の斜め前という位置にあり、現在では芝生で覆われた駐車場にすぎないが、そこには大きな説明板が立てられ、「総統の地下壕」に関する詳細な解説が図面付きで書かれている。「ユダヤ人記念碑」やブランデンブルク門を訪れる人々と比べれば、駐車場の説明板を見に来る人は決して多くはないが、さまざまな年令のドイツ人が数人ずつ訪れては、時間をかけて熱心に解説を読んでいる。

政府防空壕

戦争の痕跡である地下壕がいまだに残っているのは、ベルリンだけではない。再統一から8年後の1998年、ドイツ西部のパート・ノイエナール＝アーヴァイラーに巨大な地下壕が存在することが明らかになった。これは冷戦時代に、旧西ドイツ政府が非常時に備えて整備した「政府防空壕」である。第二次大戦の激戦地レーマーゲンからアール川をさかのぼったところに位置するパート・ノイエナール＝アーヴァイラーは、高級保養地のパート・ノイエナールと、城壁に囲まれた中世の町アーヴァイラーが合併して誕生した街である。アーヴァイラーの城門から約1km離れた町外れに、「政府防空壕 (Regierungsbunker)」がある。

これはもともと防空壕ではなく、鉄道のトンネルとして建設されたものであった。以下、*Der Regierungsbunker im Ahrtal und seine Geschichte* の記述に沿って、政府防空壕がたどってきた数奇な運命を概観してみよう。

1913年、鉄鉱石産出地で当時ドイツ帝国領であったアルザス・ロレーヌ地方と石炭産出地であるルール地方を結ぶための鉄道敷設が計画された。路線中、高低の差が激しいアーヴァイラー近郊には、1273mのクックスベルクトンネルを始めとして、ジルバーベルク、トロッツェンベルク、ゾンダーベルク、ヘレンベルクの5つのトンネルが建設された。第一次世界大戦勃発後も工事は続行されたが、第一次大戦でのドイツの敗北と、1923年になってフランス軍とベルギー軍がルール地方を占領したことで、この路線の活用は絶望的となり、工事は中断した。

放置されていたトンネルが再び活用されるのは、ナチス政権時代の1935年である。失業者対策に取り組んでいたナチス政権が、この地でのマッシュルームの栽培を思いついた。当時、高級食材であったマッシュルームの供給はハンガリーとフランスからの輸入に頼っていたが、高い関税のため高価なものであった。アーヴァイラーはドイツでは珍しい赤ワインの産地だったので、赤ワインと合う食材のマッシュルームの栽培はこの地にふさわしいものであった。また、ヴェルサイユ条約で苦汁をなめたドイツには、フランスの輸入品に頼らない自国産のマッシュルーム栽培は、魅力的だったのである。このような事情で、トンネルはマッシュルーム栽培場として生まれ変わった。

それがさらに変貌するのは、第二次大戦中の1943年である。兵器研究所があるペーネミュンデが爆撃されたことを契機として、アーヴァイラーの二つのトンネルを武器製造工場に改造することとなったのである。補強工事ののち、トンネルはナチス・ドイツのV2ロケットなどを製造する秘密工場となり、労働力として強制収容所から収容者が送り込まれた。

終戦後、この地を占領したフランス軍は、将来のトンネル利用を不可能にするため、入口を爆破した。にもかかわらず、その後の冷戦時代が始まると、このトンネルは再び利用されるのである。1958年にアデナウアー率いる西ドイツ政府は、ワルシャワ条約機構軍による西ドイツおよび西ヨー

ロッパへの攻撃を恐れて、「政府防空壕」建設の秘密計画検討を開始した。防空壕は、有事には首相をはじめ、政府要人と政府機関が素早く移動できる場所であってはならない。そこで選ばれたのが、西ドイツの首都ボンに近いアーヴァイラーのトンネルであった。トンネルを政府防空壕に改造する工事は1959年に始まり、1965年にクックスベルクトンネル、1972年にはトロツェンベルクトンネルの改造が終了している。

地下道でつながれた二つのトンネルには、臨時政府機関が機能できるのに十分な設備が備えられた。その結果、「政府防空壕」は総延長17.336km、非常時には3000人が30日間避難できるという大規模なものとなった。すでに1966年には、政府防空壕での最初のNATO演習が行われ、当時の首相エアハルトがトンネル内の臨時政府に実際に数時間滞在している。しかし、幸いなことに政府防空壕が実際に使われることはなく、最後のNATO演習が行われた1989年、ついにベルリンの壁が崩壊し、ドイツ再統一の道が始まったのである。²²

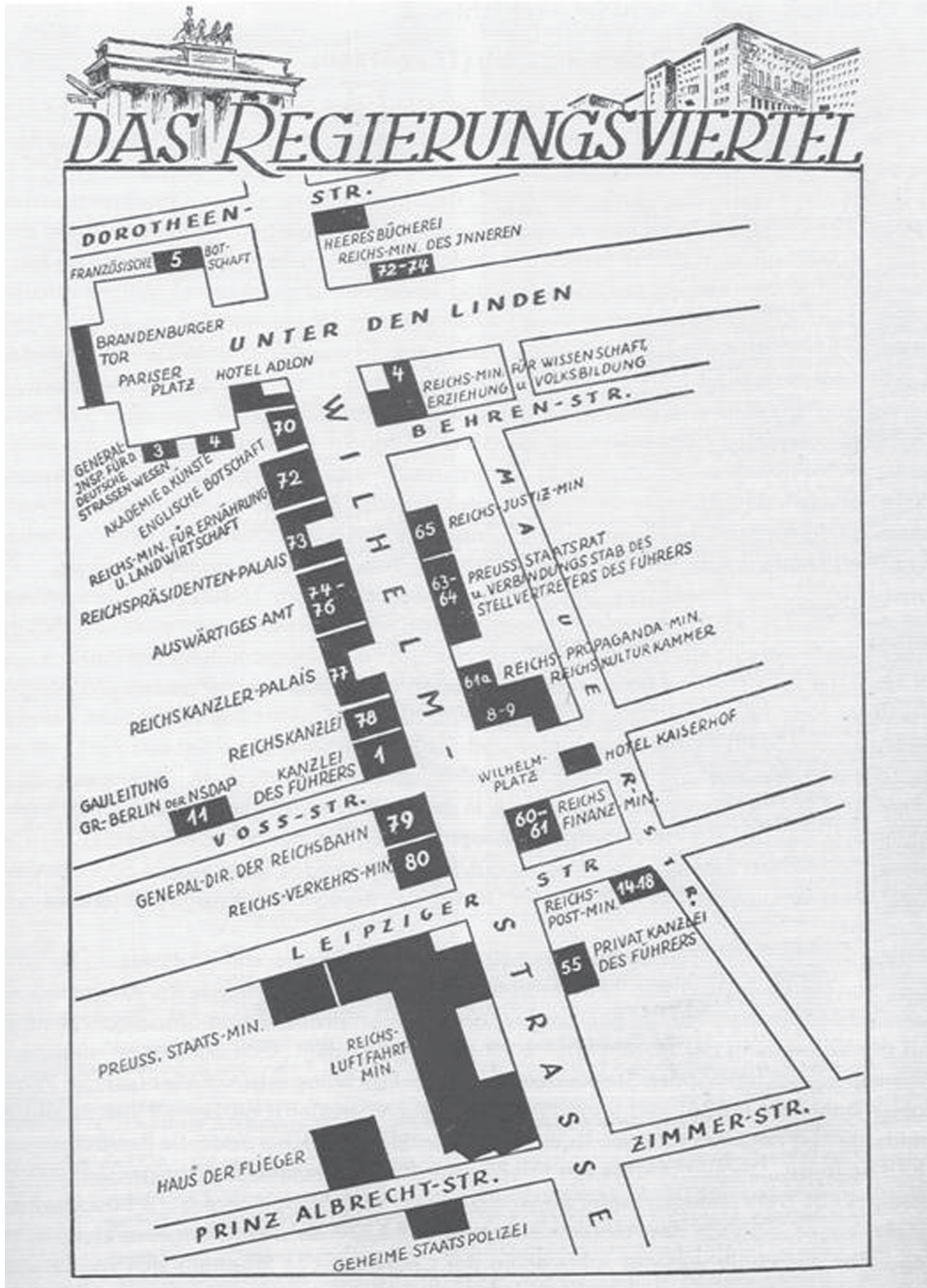
役割を終えた政府防空壕の廃止が決定されたのは1997年、機密事項からはずされて一般に知られるようになったのは1998年のことである。その後、2001年から2006年にかけて防空壕の一部を改造し、2008年から"Dokumentationstätte der Regierungsbunker"「政府防空壕展示場」として公開されている。

鉄道トンネルとして建設され、ナチス時代には農業と軍需産業に利用され、さらには冷戦時代のシェルターに変身した「政府防空壕」は、ドイツの歴史の特殊性を表すものである。それが今や戦時の役割を終え、歴史を物語る展示場となっている。これもドイツの二重の戦後を象徴する場所であるといえよう。

終わりに

以上、ドイツで行われている「戦後処理」のごく一部について報告した。分断国家が再統一されただけでなく、分断されていた首都を再び統一国家の首都にするための大改造という未曾有の大事業がまだ進行中のドイツにおいては、二重の戦後処理が今も各地で続いている。その処理の仕方は、これまで報告したように、いったん否定された過去を再評価するための再建、過去の歴史を未来への警告とするための記念碑化あるいは博物館化、観光資源への変貌、今もなお危険性をはらむものとしての封印あるいは破壊など、さまざまである。ドイツの「戦後」はまだ当分終わりそうもない。今回報告できなかった多種多様な戦後処理については、今後も調査を続けて報告したい。

別図:1936年、ベルリン・ヴィルヘルム通り周辺の官公庁街 (Topographie des Terrors より)



注

- 1) Friedrich II. (der Große 1712~86、在位 1740~86)
- 2) Friedrich Wilhelm I. (1688~1740、在位 1713~40)
- 3) Petra Wesch: *Schloss Sanssouci*, Prestel Verlag, 2003, S.29
- 4) Friedrich Wilhelm II. (1744~97、在位 1786~97)
- 5) 魚住昌良『ドイツの古都と古城』山川出版社 1991年 S.106
- 6) 七年戦争において、フリードリヒ率いるプロイセンがロシア＝オーストリア連合軍に大敗を喫した際、連合軍が攻撃を続けなかったため、プロイセンが危機を免れた事件。
- 7) アルベルト・シュペーア『第三帝国の神殿にて 下』中公文庫 2001年 S.360～361
- 8) Wilhelm I. (1797～1888、在位 プロイセン国王 1861～88、ドイツ皇帝 1871～88)
- 9) Manfred Rahmel: *Koblenz -Farbbildführer durch die Stadt*, Rahmel-Verlag, S.6~7
- 10) Friedrich Wilhelm IV. (1795～1861、在位 1840～61)
- 11) Heiko Laß: *Der Rhein- Burgen und Schlösser von Mainz bis Köln*, Michael Imhof Verlag, 2005, S.94~96
- 12) Rainer Hartmann, Frank Paul Kistner: *Berlin- Ein Rundgang vor und nach dem Mauerfall*, Edition Braus im Wachter Verlag, 2008, S.44
- 13) 同書 S.44
- 14) 同書 S.46
- 15) Reinhard Rürup (Hrsg.) : *Topographie des Terrors* , Verlag Willmuth Arenhövel, 2005, S.198 ただし、ベルリンで地名変更を丹念に調査し、インターネットで紹介しているサイト Berliner Stadtplanarchiv によれば、地名変更は 1951 年には限らないようである。
- 16) Friedrich Ebert (1871~1925)
- 17) Hermann Göring (1893~1946)
- 18) Reinhard Rürup(Hrsg.) : *Topographie des Terrors*, S.15
- 19) Joseph Goebbels (1897~1945)
- 20) Maik Kopleck : *Berlin 1933-1945* , Christoph Links Verlag, 2004, S.26~27
- 21) 『ヒトラー～最期の 12 日間～ エクステンデッド・エディション』解説書 日活 2004年 S.2
- 22) ここまでの「政府防空壕」についての概要は Christoph Bach 著 *Der Regierungsbunker im Ahrtal und seine Geschichte* (Gaasterland Verlag, 2010) に依る。